

『おこりじぞう』

山口勇子・作・より

《わらいじぞう》

そのおじぞうさんは、まんまるい顔をして、いつもいつも「うふふつ。」と笑っているような石じぞうでした。それで通りかかる人はみんな、「わらいじぞう」とよんでいました。

ある日、通りかかった女の子もまた、そんな石じぞうを見ると、「おじぞうさん、わらつてる。」といつて笑つてみせました。

《おそろしい日》

その朝も石じぞうは、笑った顔で立っていました。真つ青な空の下、きゅうに飛行機があらわれたのです。次の瞬間、

目の前に太陽が落ちた、としか言えないほどの強い光、ガラスも柱も人も焼きつくされる大爆発。原子爆弾というものが落とされたのです。

石じぞうの前にも、たくさんの人びとが焼けただれたまま、にげていきます。そんな中、いつか石じぞうの横を笑つて通りすぎた女の子が、ひどいやけどをして、たおれるようにあらわれました。女の子は石じぞうの

石じぞうは、なぜ怒った顔に変つてしまつたのでしょうか。どんな気持ちで、そうなつてしまつたのでしょうか。ぜひ続きを読んで、みなさんで考えてみてください。
お話を長さは少しづがいますが、この物語は絵本でもあります。

『ちいちゃんのかげおくり』

あまんきみこ・作 より

《空の記念写真》

みなさん「かげおくり」って遊びを知っていますか？ちいちゃんに遊びを教えてくれたのは、お父さんでした。お父さんが戦争に行く前の日、家族みんなで行つた、お墓参りの帰り道、空があまりにも青くきれいだったので、「かげおくり」をしようということになりました。

「とお、かぞえるあいだ、かげぼうしをじつと見つめるのさ。とお、といつたら、空を見あげる。すると、かげぼうしがそつくり空にうつってみえます。」

みんなで手つなぎ、十数えて見あげると・・空には白い四つのかげぼうしがうつりました。それは、家族にとって大切な記念写真になりました。

次の日、お父さんは列車に乗つて戻ってしまいました。

《空色の花畠》

《はげしくなつていく戦争》
それからといふもの、ちいちゃんはお兄ちゃんと一緒に空を見上げては、かげおくりをして遊びました。

しかし、だんだんちいちゃんたちの町も爆弾をつんだ飛行機がたくさん飛んでくるようになります。

夏のはじめのある夜、空襲けいほうのサイレンで、ちいちゃんたちは目がさめました。赤い火に追われ、たくさんの人の中で、ちいちゃんはお母さんと兄ちゃんとはぐれてしまいます。その夜、ちいちゃんは知らない人たちの中で、いつしょに眠りました。

次の日の朝、町のようすは、すつかり前とは違つていました。あちこちにけむりが残り、家はすべて焼け落ち、ちいちゃんの家もまた、焼けてなくなつていきました。そんな中、お母さん達は必ず帰つてくると信じて待ち続けます。くらい防空壕で何日も何日も…。

「とお！」
と言つて見上げたちいちゃんの目にうつたのは、あの時と同じ四人の白いかげでした。
その時、ちいちゃんは体がすうつと空にすいこまれていくのがわかりました。そこはいちめんの空の色、空色の花畠でした。
ちいちゃんは、きらきら笑いながらかけていました。
夏のはじめのある朝。ある小さい女の子のお話です。